

卒業論文のフォーマット

【問題提起】（「問題」、「序論」、「はじめに」など）

論文を書き始めるにあたって、「どのようなことが問題・課題となっているのか」を明解に示す箇所。分量は 2,000～4,000 文字程度が妥当（あくまで目安として）。論文は、過去の知見をまとめる「調べ学習」とは異なり、「これまで論じられてきたこと」をしっかりと押さえながら、「まだ誰も論じていないこと」を明らかにする必要がある。（※大学生の卒業論文では、そこまでの学術的な厳密さは求められないことも多い。ただし、大学院生の修士論文、博士論文では、先行研究を読み、精査した上での論文の新規性、オリジナリティを示すことが必須となる。）

なお、「どのようなことが問題となっているのか」を明らかにするために、先行研究の代表的な議論を概括的に示し、知見の見取り図を示すことが求められる。従って、【本論】の「先行研究の精査」の箇所とある程度重複する記述になる。むしろ、ここでは【本論】の前提部分を要約して、読者に示すことが重要である。

【目的】

前項の問題提起を踏まえて、論文の研究目的を明確に示す箇所。3～5 行程度の簡潔な文章にまとめると良い（※指導教員の指導内容によっては、長く、詳しく書くこともある）。この箇所を読んだだけで卒業論文の主旨が明解に伝わるようにすることが重要である。

【方法】

前項の目的を満たすために、「この卒業論文では、どのような理論・方法論的な枠組みを用いるのか？」ということについて、具体的な論述や調査分析を行う前に明確に示しておく。さまざまな学問分野において、これまでに理論や方法論が提示されてきた。その中には、いわゆる「混ぜるな危険！」的なものも含まれる。一例として、人文学の場合、文献資料を実証的に調査することによって客観的な〈正解〉を導き出そうとする伝統的な研究と、そのような〈正解〉を相対化し、読みの多様性を重視するポストモダン以降の研究は、外部世界（＝我々が生活している世界）を観察するための認識論が根本的に異なっている。従って、原則としては、一本の論文の中でそれらの共役不可能な方法論を交ぜることはできない（あえて方法論的に併用する場合は、それなりの吟味を行う必要がある）。

【本論】

・ 先行研究の精査

学術的な論文を書きはじめるにあたって、先行研究を読み、それらの論点を整理しながら、「自分が論じたいこと」を知見の見取り図の中で位置づけていく作業が必須である。この箇所の分類には、3,000文字から、多い場合には5,000文字程度を要すると思われる。

・ 仮説生成

本論を具体的に書き進める前に、「この研究では、どのような主張を行おうとするのか」(仮説)を示しておく。それをもとに、問題・課題の解明に向けて、どのような調査方法が妥当であるのかを示し、以下の分析と考察の箇所の枠組みを明らかにする(「方法的枠組み」の部分で示した見取り図に基づきつつ、先行研究をもとに、より具体化する)。

・ 分析(分野によっては、インタビュー、アンケートなど)

先の仮説生成をもとに、その論文における研究の核となる分析を行う。人文学的な研究であれば、テキストとなる文章を読み込み、分析していく作業となる場合もある。一方、社会調査的な内容であれば、この箇所でインタビューやアンケートの調査結果を示すことになる。図表を含めて、ある程度の分量・文字数となることが想定される。

・ 考察

先の分析結果をもとに、自分なりの考察を行う。主観的な感想を加えることは原則としてできないが、いかに厳正なる客観的な分析調査を行ったとしても、最終的には、調査者の解釈を加える必要がある場面もある。そのような場合には、あくまでも学術的な正当性を損なわないように、十分に留保を加えながら論述する必要がある。短い文字数で簡潔に考察する場合もあれば、人文系の研究のように、テキストとなる文章に立ち返りながら、ある程度の文字数を割いて精緻な検証作業を行うこともある。

【まとめ】(結論)

以上の分析と考察を踏まえて、この論文の結論を示す。内容的には【本論】と重複して構わない。(むしろ、ここは研究を総括する箇所であるから、新しい視点を盛り込む必要はない。要約力が問われると考えてよい。)

また、過去の研究と比較しながら(これも【本論】の「先行研究の精査」の箇所とある程度

重複してよい、本研究にはどのような点で意義があるのか（新規性、オリジナリティ）を明確に示すことが重要である。それと同時に、一本の論文で、研究分野のあらゆる課題をすべて解決することは不可能である（学問の世界には、そんなリーサルウェポン＝最終兵器のような万能理論は存在しない）。従って、この研究には、そのような限界があるのか、次なる研究の課題（自分自身でそれを解くかもしれないし、あるいは、他の研究者が解いてくれることを期待することもある）を示しておくことが、学問における真摯な態度である。

【引用文献】

- (1) 西條剛央『SCQRM ベーシック編 ライブ講義 質的研究とは何か』（新曜社、2007年9月）
- (2) 西條剛央『SCQRM アドバンス編 ライブ講義 質的研究とは何か』（新曜社、2008年5月）

※参考文献の記載については、分野によって相違がある。原則として、指導教員の指示を仰ぐことが必須である（ただし、大学生の卒業論文の場合など、そこまでの学術的厳密性が求められない場合で、なおかつ、とくに教員からの指定がない場合には、関連分野の論文を参考にして記載しても問題ないと思われる）。